

一〇、佐倉の武家屋敷群

建築家・新建代表幹事

三沢 浩



当初、建築めぐりのスケジュールの相談に乗っていた時から、何とも音痴な話だが、佐倉と佐原を間違えていた。「武家屋敷」の視察といわれた折に、遠い昔に見たことのある、佐原の伊能忠敬の屋敷辺りのことを考えていたのだから情けない。確かに佐倉には来たことはあった。芦原義信の大作「歴史民俗博物館」が出来てすぐの頃、京成線で見に行つた古い記憶がある。しかしその折は、市内に足を踏み入れていない。今回、車に同乗させてもらつて建築めぐりをして、初めてこの佐倉の城下町が佐倉城と共に、天然の要塞の中にあることを実感した。つまり丘の上に築かれた城と大手門を隔てて、城下町が尾根を通る一本の道の上に築かれた城下町となり、そこに人が住み、現在の京成駅もJR駅もその丘を挟んで、南北の谷に線路を巡らしていることを知った。谷には高崎川が流れ、城の濠を越えて西の鹿島川に注ぎ、それがまとまって北に印旛沼が広がっていた。

今は埋立てで幾許も残らぬ印旛沼だが、旧制中学校で初めて見た地理の教科書には、関東の五大湖沼として、大きく載っていた。さてその市街地には、視察を目指す「市立美術館」や「市役所」もあったが、その南には「武家屋敷群」があった。市街地といったが、それは昔の町人町で、麻賀多神社を境としてクランク状の角の東に連なる。神社の西にやや下つてゆく道は、宮小路と大手門を経て、武家屋敷がかつて並んでいた広小路を経て、城内に入る。宮小路から南に上つた鍋木小路に、平成年代に復原された三軒の武家屋敷があった。何れも市や県

の指定文化財で、ひっそりとした道に南面してその三軒が連なっていた。

何の予備知識もなく、いきなり行つてから渡された、教育委員会の案内書を見て知つたのだから、見るポイントもずれていたかもしれない。丁寧な案内係の中年の女性の言葉も、少々聞きながら写真を撮っていたから、これもまたいい加減のことになってしまった。だがこの三軒を手早く廻つて、妙なことに気が付いた。同行の幾人かが同じ疑問を持ったのだが、南入りの門を入つて行くのに、そのどの屋敷も南向きの方位を無視して部屋づくりをしていたことだ。当日は曇天で太陽の位置が確かめられなかったが、南入りであり「旧河原家」「旧但馬家」共に客間重視で、その座敷が南面の縁側を持っていた。ところが住居部分の居間は、東に縁側を持っていて、座敷に居心地を譲っていたのが異様であった。三軒目の、移築された「旧武居家」は小型で、方位はそのままであったかは分からないが、これも座敷の八帖が西に面し、居住用の六帖は東に縁側を持っている。

このように共通の客室重視、常住の部屋が東というのは、解せない問題であった。同時に三軒共に鬼門の北東または南西に水場の便所、湯殿があつたのも気になる所であった。これについては案内書もふれず、同行者たちの論も聞けなかった。どの敷地も狭く、与えられた土地割りの中に、工夫してL字、T字の平面を計画し、中で接客部分を重視し、しかも背後に少しでも働く余地をつくっていることは明白だった。門から玄関へ、そして不

相応な客用の玄関と、客用の座敷には眺めの良い南西の前庭をとっていることも良く分かつたのである。

武家屋敷の規模と様式、使う材料が、佐倉藩の厳しい居住の制度に基づいていることが、説明されている。幕府の天保の改革の趣旨に沿い、贅沢を逸脱行為としたからだとある。だから禄高の石数に応じた「居住の制」では、玄関の間口、座敷の長押の有無、畳の種類も規定されているといい、白壁の旧河原家に対して、土塗壁の旧但馬家に差がついていた。三〇〇石以上は六三坪まで、腕木門、長押が元からあれば可。座敷、居間に畳のへり可。一〇〇石以上は三三坪まで、木戸門、長押は不可、座敷以外はへり不可となっていると説明に書いてあつた。実際の状況についての詮索は面倒だったから見るのをやめた。

細かい所は見なかつたのだが、この屋敷の並ぶ通りの整頓された現状は、短い区間とはいえなかなかなもので、道路から三段あがつて木戸門があり、立派な石の階段と玄関までの飛び石は、見事であつた。平成元年、四年、八年に修復、復原して公開しているという。当初からそれぞれに石柱の案内をとりつけ、少なからぬ手入れをしていることは明らかであつた。入場料をまとめて数百円取るにしても管理が行き届き、これから佐倉市の名所のひとつにしようとする気構えを感じた。

全国的に起こりつつある、江戸時代の城下町の復旧、または復原は、歴史の見直しとして大切であることは十分に誰も承知している。そして何れの城下町も城を町の

誇りとし、文化の保存に尽していることを示そうとする。天守閣だけが残つた所は、その周辺の遺構に手をつけている。天守閣もなく、石垣や濠だけの遺構の残る所は、大阪や名古屋のようにRC造の天守閣をつくつた。城といえは、井上宗和の研究は第一人者、城とまちづくりといえは伊藤ていじの右に出る研究者はいない。その井上宗和の一九六一年の古い本によると、現在の天守閣は一、二、建物の現存する城跡は一五、復興天守閣の数は一六となっている。ごく数年前にも三層の掛川城が出来たのを知っているが、現在ではもつと増えていることは確かである。しかも長浜城のように、大手門から城下町をつくりつつある所もあり、まちづくり熱が城から発している所は少なからずある筈だ。

復原された武家屋敷や、それに類する文化財も、文化庁が次第に手を広げていることであるし、近年は場所を指定して文化財発掘を義務づけてきたから、縄文時代や石器時代のものばかりでなく、江戸時代の遺構とても方々で発見され、大切なものはそれなりに保存の手当てをしているから、増える一方だろう。今までの建築やまちづくりが、あまりにも新しい文明のみを追いかけてきたから、そして古いものを歴史的遺産として重視しなかつたから、今になってつげが廻ってきたような気がしてならない。それにしても明治の文化は一方では新しい世界を追いながら、よくも古いものを気軽に捨てたものだと思う。これは「近代建築」が「使い捨て建築」になっているのと、大同小異ではあるがどうだろうか。(続)

